

伝文

日本口承文芸学会 会報
第47号 2010年11月 発行

日本口承文芸学会
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學文学部 花部英雄研究室
TEL 03-5466-0224 (直通) / FAX 03-5466-0368 (資料室)
E-mail koshobungei@mail.goo.ne.jp

昔話を、新しい語りに繋ぐ試み

佐々木達司

町の本屋で関敬吾編『日本昔話集成』に出あったのは1955年である。小さいころ聞いていた昔話が学問になることに衝撃を覚え、手探りで聞き書きを始めた。敗戦から10年、まだ出版事情もよくなかったが、中断していた研究書や資料集が出はじめていた。暮らしは戦前のままで、まだ昔話を聞いて育った人たちがいて、炉端で聞く事ができた時代であった。

民俗学とは無縁だったが、1977年に日本口承文芸学会が発足してからは勉強の場もでき、多くの研究仲間に出会えた。大学の集団調査も行われ、カセット・テープレコーダーの普及によって、正確な文字化ができるようになった。コピーやワープロが使えるようになって、作業が格段に早くなった。思えば隔世の感がある。

60歳で仕事から離れてからは、青森県史や市町村史を担当した。県内各地を廻りすぐれた語り手たちの話を聞くことができた。青森は比較的遅くまで伝承的な語り手が残っていた地域だが、今は二、三を教えるに過ぎない。戦後の口承文芸再興期に昔話の聞き書きを始めたが、今はその終焉に立ちあう思い、感無量である。

一方、読み聞かせ語り聞かせの運動が盛んになり、わたしもたまに講座によばれる。新しい語り手は伝承的な昔話を聞いたことがなく本で覚えた話を語っている。よく勉強もしており語りも上手である。しかし、伝承的な語りを聞いてきた耳には何かが違うのである。学会には、調査もやれば語りもやり、再話をしている方々がおられる。わたしは語り下手、再話もほとんどしていないが、伝承的な語りが途絶え昔話が新しい語り手の手に引き継がれる今、両者を繋ぐ仕事ができないかと、75歳にして再話集を思いついた。生かされていれば80歳までに、青森に伝承されている中から300話を再話し、『よんであげたい青森のむかし話』シリーズとして5年間に10巻を刊行しようと考えた。おはなしの語り手、村田良子さんに共編をお願いし、昔話研究と語りによる二人三脚でやっている。これはあくまで、わたしたちが語るとすれば……という一つの試みに過ぎない。

添い寝しながら読めるよう大きな活字、総ルビとし、方言はルビや割り注で補った。聞き手が集中できるよう挿絵はつけず、所々にわらべうたを入れた。難しいのは方言表記である。地域や世代によって異なるので、この本を読んでもくださる方に分かって貰えるかどうか、試行錯誤が続いている。

資料のカード化に1年、2年目に1～3巻、今年は3年目で、4～6巻が11月に出る。

第59回研究例会シンポジウム 『『世間』という問いから』

小池 淳一

2010年3月21日に國學院大學を会場として第59回の研究例会を『『世間』という問いから』というテーマで開催した。報告していただいたのは野田潤（めぐみ）氏（東京大学大学院博士課程）、山田巖子氏（弘前大学）、野村典彦氏（千葉大学）の3人で、司会は例会担当理事の戸塚ひろみ氏と小池淳一が務めた。

最初に戸塚氏が今回の趣旨を以下のように説明した。「最近、民俗学や口承文芸研究以外の領域で、「世間」という言葉が、日本の社会のありようをとらえるためのコンセプトとして、注目されてきています。西洋社会史家であった故・阿部謹也氏は、ヨーロッパの人と人のつながりかたの歴史を問うてきた末に、それと日本の人とのつながり方を、比較しながら検討するなかで、「世間」という概念に注目し、取り上げ、「世間学」という学を提唱しました。

それは、「社会」という抽象的なコンセプトではなく、日本という歴史に規定されながら生きる私達が、日常で使ってきた言葉から、わたしたちの関係性の歴史と現在を考えていくという発想によるものであったことは確かです。

この「世間」という概念を、学問の概念として積極的に位置づけたのは、民俗学、それも「世間話」という口承のジャンルを設定していた口承文芸研究でした。1980年代から「世間話」を積極的にとりあげるようになった私達は、この「世間」を、正面から見据えることができる、もっと言ってしまえば、見据えなければならない立場に居るのではないかと考えています。

私達は、この「世間」という言葉により、人がことばを交わしあい、さらにはその「ことば」を使い「話」という表現様式によって、自分たちが生きている身の回りの世界や、また自分たちが生きてきた歴史を構築しながら生きているということを具体的に検討してきました。それは、「世間」というコンセプトを抽象的なレベルの単なる概念にしてしまわずに、常に、ひとの営みの現場から「世間」をとらえることを可能にできたといえます。

今回は、そうした私達の蓄積をふまえ、これまで「世間話」というと、どちらかという「話」に軸足を置いて展開してきたことを、一度、「世間」というコンセプトに重心を移動させて考えてみたい、と思います。

「世間」は、少なくとも社会という概念とそのまま置き換えることができる言葉でもなく、人の集合をあ

らわすだけの言葉でもありません。もっと、動きのあるものなのではないでしょうか。

そこで、今回は、これまで「世間話」研究をリードしてきた本会の会員である山田巖子さん、そして世間話というコンセプトを、伝説などとの関わりの中かで豊かに押し広げてきた野村典彦さんにご登壇いただくとともに、社会学の立場から、「世間」に切り込んでいただくために、東京大学大学院博士課程に在籍されている野田潤（めぐみ）さんに参加していただくことにしました。野田さんは、新聞の「身の上相談」を素材に、日本の近代における人とひとのつながりのありかたを研究されています。このお三方のお話をもとに、もういちど、「世間」という問いをとらえなおしてみたいと思います。」

以下、一人30分を目安に報告に移った。

第1の報告は野田氏が、家族社会学の立場から、「新聞紙面上の離婚相談に見る「世間」の変容」と題して民俗学、社会学の事典類における世間の定義を確認した後、『読売新聞』の「人生案内」（1914～2007年）を対象として、そこでの回答が規範準拠集団としての機能を果たしていること、その内容が変化し、規範としての機能を失い、変容していることを指摘された。

第2の報告は山田氏が、「世間の変貌と語り—戦中・戦後の巫女をめぐる—」と題して、従来の口承文芸における世間話研究における「世間」が固定的な準拠集団として捉えられてきたことを確認した後、青森県下における口寄せ巫女による戦死者の語り、戦後社会の展開とともに変化していく過程を考察した。巫女が日常生活のなかで存在する「小さな世間」が戦後社会という「大きな世間」をさまざまに取り込みながら変貌していることが指摘された。

第3の報告は野村氏が、自己の調査の際のことばのやりとりを対象化し、「言語にされた世界観—世間のすりあわせとしての世間話、あるいは伝説—」と題して、近代の旅が民俗学の営みの輪郭を規定していたことを指摘した後、探訪者との会話のなかに過去の風景や自分史のかたちで世間が現出することを述べ、伝説の語り口についても言及された。

その後、討論に移り、「世間」という問いで、「社会」や「公共」とは異なるものが見えてくるのか、「生活譚」という概念の意義と射程、「村ばなし」という視点が設定された背景などをめぐって活発な議論が行われた。新しい領域と言われてきた「世間話」もかなりの研究の蓄積が存在し、それらをふまえてより豊かな可能性が広がっていることが全体として確認できたように思われる。（東京都）

第59回研究例会シンポジウム
「世間」という問いから」参加報告
根岸 莫之

2010年3月20日、國學院大學で開催された研究例会は、いわゆる「世間話」研究に焦点を当てたものではあるが、コーディネーターの重信幸彦氏の“「世間」という問いから研究を問い直す”という意図は、これまでの発言からも明らかのように、ジャンルとしての「世間話」をターゲットにしたものではなく、口承文芸研究総体の可能性を探りたいというところにあったと思われる。

野村典彦氏の「言葉にされた世界観—世間のすりあわせとしての世間話、あるいは伝説」は、土地にまつわる話（必ずしも従来の「世間話」とはいえないようなものも含め）を具体例に示しながら議論が進められた。

まず、民俗学自体が、「世間」とは等号で結ばれないもの（＝人々の手足の感覚では捉えきれない国家・世間の広がり）を遠景に見ながら、地に足の着いた、新しい生活の模索をするという、双方を比較する眼差しの旅なのではないかとする捉え方を示した。

そして、自身の聞き書き資料を元に、採訪者に対して伝えられた言葉から「世間」を探る視座として、採訪の場で伝えられる言葉は、「言葉にされた過去の風景という世間」であったり、「言葉にされた自分の歴史という世間」ではないかと提起し、一見、夾雑物に感じてしまう話者の土地にまつわる「言葉」を丹念に見ることで、「世間」を浮き彫りにすることができるのではないかとされた。

学会外の発表者である野田潤氏は社会学の立場から、「新聞紙面上の離婚相談に見る「世間」の変容」の演題での発表。『読売新聞』『人生案内』1914年～2007年までの資料を元に、「子どものいる離婚」について、どのような相談と回答が寄せられているかを分析された。必ずしも「口承」の形を採ってはいないが、社会一般に読まれることを意識して採用されたものであり、そこには、「子どものいる離婚」に対する規範的な語りを見出すことが出来るという立場であった。

1920年代までは、離婚して里子に出すことが負のサンクションになっておらず、むしろ、里親探しの斡旋に近い形で、相談者と読者の「世間」が形成されていたものが、1930年代から70年代は、「子どものために離婚は我慢しなさい」という規範的な語りを中心に、投稿欄が「世間」として機能していったとする。

1980年代からは、「離婚してもいい」とか離婚の是非に対して判断保留の回答が多くなり、「あなたの心のままに」という主旨の回答が増えたと指摘し、「人生案内」という場が、「世間」の規範を提示する場とは機能しなくなったのではないかと分析する。

こうした変化は、価値観の多様化というありきたりな指摘に留まることなく、家族が社会や世間と孤立して、それ自体で閉じてしまい、「家族語り」という文脈において、「社会」や「世間」が遠景に遠ざかってしまっているのではないかと、踏み込んだ指摘もされた。

3人目の山田巖子氏は、「世間の変貌と「語り」—戦中・戦後の巫女をめぐる」の演題で、青森県の口寄せ巫女が、「戦争」という「大きな世間」の動きの中で、どのように理解され、また「口寄せ」の具体的な「カタリ」の中に、「大きな世間」がどのように語り込まれているかを、詞章を示しながら紹介された。

ことに、戦死者の口寄せの詞章に、「靖国神社」などの言葉が見られる事例など、興味深いものがあった。

野村氏の発表は、フィールドワークとしての感性が鋭く出た内容であったが、そこから、どう世間話研究や伝説研究へと敷衍化していけるか、理論的な整理を今後期待したい。

野田氏の発表は、分析としては整然としており、納得行くものであったが、ここから「口承」研究へと一歩踏み込んだ議論に展開していただけるとありがたい。

山田氏の発表は、研究史の問い直しにも広がる、スリリングな話題であったが、フロアからの指摘にもあったように、「語り」ないしは「語り物」というタームまで、必ずしも十分に届いていなかったのも、その点を改めて伺いたいと思った。

3者の発表は、それぞれが具体例に基づくユニークなものであったが、重信氏は、フロアとの議論なども含めて、「世間」というワードは、「媒介者」であったり、「動き」というようなワードと、響き合うものではないかと整理された。「ウチ」と「ソト」をつなぐコンセプト（動き）のようなもの」というニュアンスだったように思われた。

私なりに言い換えると、共通して見えてきたものは、「世間話」とは「語り手」と「聴き手」との間に生まれてくるものであり、そこには、「大きな世間」と「小さな世間」とのすり合わせが見てとれるという点であろう。

山田氏の発表にもあったように、従来の研究における「世間」とは、「世間」という準拠集団が先にあって、その中で交わされる固定的な価値基準の表出が「世間話」と捉える視座であったのに対し、これからの研究は、「話」によって「世間」が作り出されていくという側面に力点を置いて、研究を進めていく方向性が見えたように思われる。

ただし、「昔話」研究のように、対象となる話を誰が見ても明らかに指定しにくいものがあり、その点は、これからも悩ましい問題となろう。また、今回の発表はジャンルの「伝説」「新聞」「口寄せ」などにも議論が及んだが、「昔話」の中の「世間」といった展開

も図れることを、今後の課題設定としてカウントしておきたい。
(千葉県)

第34回大会 講演

黒田日出男 氏

「山本勘助の就職と甲陽軍艦」

日本口承文芸学会第34回大会は、2010年6月5日(土)・6日(日)、大正大学大崎校舎において行われました。大会参加者による公開講演・研究発表・シンポジウムの報告を掲載いたします。

第34回日本口承文芸学会大会 プログラム

第一日 6月5日(土)

開会の辞 日本口承文芸学会会長 花部 英雄

公開講演

山本勘助の就職と甲陽軍艦

立正大学教授 黒田日出男

奄美・沖縄の民間説話研究の回顧と展望—私的回想などを中心に—

鹿児島国際大学名誉教授 山下 欣一

第二日 6月6日(日)

研究発表

【第一会場】

常陸坊海尊の長寿伝説と信仰—東北地方を中心に—

総合研究大学院大学 佐藤 優

口承文芸における婚姻—婚姻法史からみ—

苫小牧駒澤大学 高嶋めぐみ

愚人譚から巧智譚へ—口承説話における主人公の転換—

立命館大学 真下 厚

台湾の美談の行方—日本統治期 / 国民党政権期 / 民主化期—

南台科技大学 伊藤 龍平

【第二会場】

オモロの対句表現からみる神女

立正大学大学院 中込 翔子

「もの言わぬ神」の「神口」—石垣島川平のマングナシー—

総合研究大学院大学 澤井 真代

アイヌ英雄叙事詩における経緯に関する発話

千葉大学大学院 遠藤 志保

『元朝秘史』におけるイエスイ后—グルベルジン・ゴア后をめぐるチンギス・カン伝説との関連で—

愛知淑徳大学 藤井 真湖

シンポジウム

「うた・語りにおける人称—だれが語り歌うのか」

アイヌの物語文学から 千葉大学 中川 裕

古代ヤマトの歌と物語から 武蔵大学 古橋信孝

奄美・沖縄の歌と語りから 立正大学 島村幸一

(司会) 大会委員 三浦佑之

閉会の辞 日本口承文芸学会大会委員 常光 徹

明治25年のこと、山本菅(=勘)助の子孫が、史料編纂所(の前身である臨時編年史編纂掛)を訪れて、粗悪な写しを持参したので、その「山本菅助文書」は偽文書とされ、ただし影写はなされた。

日本近代の歴史学がかくして『甲陽軍艦』を「偽書」化し、山本勘助を「架空人物」化してきたのに対し、近年になり事態が一変し、武田晴信自筆の菅助宛て書状を含む、安中市の真下家所蔵文書、山本菅助家伝来の文書、絵図なども見つかり、発見に努められた黒田氏は、勘助を架空虚構の人物とするわけにゆかないと主張し、近現代の歴史学の作りだした「冤罪」だったと告発する。

代々「山本菅助」を名のる菅助家のその後をずっと追いかけて、高崎藩士として奉公するまでの経過を、「山本菅助の子孫の『就職』」という視角で氏は論じすめられた。就職には『甲陽軍艦』も役立っているという次第だ。

もう一つの柱が『甲陽軍艦』とは何かという興味深い論点である。何年何月何日にだれがどこでどうしたのかという点では不正確な記述であるのを、「何故か」と問いかけて、これを「雑談(ぞうたん)」として捉えられるとし、書き物としての在り方、記述のしかた、語り手や書き継ぎ、口述筆記という問題へと展開された。日本史学は「文学史料」としての『甲陽軍艦』にどのように向かいあえるのだろうか。

黒田氏は史料編纂所定年退職後、立正大学に勤めて数年のあいだに、絵画史料をめぐる大きなプロジェクト、院生や学生を巻き込む『信長記』の研究、そして今回の『甲陽軍艦』論というように、歴史史料学と文化関係学との間隙に次々にテーマを設定し、めざましいというほかない。まことにふさわしい人を大会の講演者に呼ぶことができた。

(藤井貞和・東京都)

研究報告 佐藤優
「常陸坊海尊の長寿伝説と信仰
—東北地方を中心に—」

長寿伝説の主人公、常陸坊海尊を祀る岩手、宮城両県に鎮座する青麻神社等の信仰について考察した発表。佐藤氏は、信仰圏が異なる岩手県紫波町と宮城県仙台市の青麻神社において、常陸坊海尊が、それぞれ祀られ縁起が作成された事と、岩手県花巻市の八幡宮、先の紫波町、仙台市の青麻神社では、あかざで作った杖を奉納すると中風にならない、また中風がなおるといふ俗信があることを指摘。さらに『代教有之御百姓書出』安永三年(1774)には、奥浄瑠璃『田村三代記』を翻案した仙台市の青麻神社の什物由来があり、語り物文芸との関わりも指摘した。また『風土記御用書上』安永三年(1774)では、眼病平癒の信仰対象だった常陸坊海尊が、化政期(1804-1829)以降、中風除へとそのご利益が変わった事や、『風土記御用書上』の記事から、栃木県栃木市の真言宗満願寺奥の院「大日の窟」と同寺開山、勝道上人との関わりから日光修験との関連も示唆した。『義経記』では衣川合戦の直前に行方不明となり、江戸時代には長寿をとげた者として古浄瑠璃にも語られる常陸坊海尊が、語り物文芸の世界から青麻神社の信仰対象へと、盲僧、修験をはじめとした人々によって、どのようにとり込まれ、その信仰が展開されてきたのか、今後の佐藤氏の調査研究が楽しみな発表であった。

(小堀光夫・埼玉県)

研究報告 高嶋めぐみ
「口承文芸における婚姻
—婚姻法史からみる—」

民事法制史を専門とされる高嶋氏の意欲的な発表であった。最初に口承文芸を資料に取り上げて婚姻を考える理由として、法制度よりも法慣習こそが古法の実質であるという立場を説明され、次いで「蛇婿入」「猿婿入」といった異類婚姻譚を素材として発表を進められた。結論として、こうした口承文芸資料を通して見る限り、婿入から嫁入への交代ではなく、庶民レベルでは両者の併存していた可能性があるとした。会場からは居住規制にのみ注目するのは婚姻の人類史的研究としては不十分であるという指摘があったほか、資料の精度や分析の水準などに関しても疑念が表された。発表者自身が最後に述べられたように、まだ着手されたばかりの研究であり、今後の進展に多くの期待を残すものであることが確認された。こうした異なる学問領域からのアプローチを容認し、止揚していくことの重要性を強く感じさせられた発表であった。

(小池淳一・東京都)

研究報告 真下厚
「愚人譚から巧智譚へ—口承説話
における主人公の転換—」

宮古島をフィールドにして、一つの愚人譚がその相手に主人公を換えることで巧智譚へと変わることに注目して研究発表は展開した。

他の地では見られない主人公の転換が宮古島でおきるのには、そこには知恵を重んじる精神風土があるからであり、愚人譚もその志向によって知恵ある話として語られてきたのだという。おどけもの話も知恵をはたらかせる話になるのは、他の沖縄にも見られない傾向だという。このことは艶話の型を主人公の転換で考える可能性も示している。

会場の質疑応答では、発表の題名では背中合わせのものに変わっていくが、内容は変わっていないのではないかと指摘があった。真下氏からは、一つの話型において、主人公が換わることによって愚人譚であったものが巧智譚へと変化を見せるのだとの答であった。この点については複数の指摘があったが、それは視点の転換であることが確認できた。

宮古島という説話伝承や歌謡の豊かな地でおきる主人公の転換は、その地域の志向に根ざしたまさに知恵そのものであり、伝承の場について改めて考えさせられた発表であった。

(遠志保・愛知県)

研究報告 伊藤龍平
「台湾の美談の行方—日本統治期
／国民党政権期／民主化期—」

美談とは理想的な、ありうべき行為・鋭意を語る物語であり、近代では主にメディアを通じて盛行した。本発表は日本統治期の台湾で「美談」となった日本人教師の殉職談がいかにかに生成されたか、また政治動向とともにその意味合いがいかにかに変容したかをたどり、「外地」における美談の位置づけを試みるものであった。

語られる出来事、意味づけられる出来事という視点からの美談研究は、近代史の国民国家論的な枠組みとは異なる側面から、美談を話す人々の内面に迫る手がかりとなることが示されたように思う。

(編集担当)

研究報告 中込翔子
「オモロの対句表現からみる神女」

琉球球王朝の宮廷歌謡集「おもろさうし」全22巻は、大半が島津氏侵略後の1623年に編まれ、難解な古

謡の背景に、王権維持の意図をよみとる必要がある。

発表者は、儀礼をつかさどる神女の階層・序列化を、美称の対句表現から探ろうとする。「きこゑ」「とよむ」(各々「名高い」「鳴り響く」意)の対句は、王府の神女オモロに頻出し、圧倒的に王権の中心にいる高級神女(君君)の美称として使われることを、用例の統計から示した。例外的に地方ノロに冠される場合も、王権との強い関わりがみられる。一方オモロ以外の周辺歌謡(ウムイ、ミセセル、オタカベなど)では、この美称はほとんど登場しない。

さらに「きこゑ」が地方オモロで地名に冠される場合があり、地方をうたうということは、王権に選ばれた土地をうたっているのではないかと示唆。地方オモロ、周辺歌謡も視野にいた実証的な比較研究であり、特権的な用語を軸に、王権の構造や内実に踏み込む新たな試みとして注目される。

(酒井正子・東京都)

研究報告 澤井真代
「もの言わぬ神」の「神口」
—石垣島川平のマユンガナシ—

沖縄県に属する八重山諸島石垣島の川平集落では、年の替わり目の節祭に、集落の男性が扮した蓑笠を着けた神「マユンガナシ(真世加奈志)」が各戸を訪問し、新年を予祝する「カンフツ(神口)」を唱えるマユンガナシ儀礼が行われる。

早くに折口信夫が、カンフツを神の一人称で語られる律文であり、文学意識の始原的なありようだと論じて以来、文学・歌謡の発生を巡る議論の中でマユンガナシは「もの言う神」として、その「語る言葉(テキスト)」の解釈が重視されてきた。

しかし発表者は、マユンガナシがカンフツ以外には没意味的な唸り声のみ発する「もの言わぬ神」でもあること、マユンガナシの神性はカンフツの内容ではなく、その「語らない身体」から生じていることを、濃密なフィールドワークから指摘した。

語られる言葉にのみ注目されてきたマユンガナシの、語らない身体や声へ注意を払うことは、神の言葉を語る・神の身体を演じるという行為への根源的な問い直しともなりうる。それはまた、口承文芸そのものの根幹を問うことへも通じてくるだろう。

(飯倉義之・京都府)

研究報告 遠藤志保
「アイヌ英雄叙事詩における経緯に
関する発話」

アイヌ英雄叙事詩の表現形式について、手堅い考察がおこなわれた。主人公の少年英雄が敵の勇士との間で次々に繰り広げる戦闘場面の描写の仕方に焦点を当て、特に「来歴話」に注目して分析が進められた。具体的には、初出の内容を語る「補完的来歴話」と、既出の内容を繰り返す「反復的来歴話」の2種類に分けて、発表者は分析を進めた。そして、ほぼすべての戦いの前に、その戦いが始まる理由や主人公に敵対する理由などの「補完」が述べられ、また、相手が変わるたびに「反復」の形で、もう一度同じ内容が簡潔に語られることが明らかにされた。これは口承の文学の語りの特徴を如実に示している。

言語表現の細部に注目した「語り」の分析は、口承文芸の特質を明らかにするうえでも、基礎となる重要な作業である。そのような作業によって、この発表では、定型的な語りと反復の組み合わせが、豊かな語りを展開していく基盤となる枠組みになっていることが、実証的に示された。アイヌの良質な語りの資料をもとにした分析は、軍記物語の語りの研究に新たな視点を提供してくれることを期待させる発表であった。

(川森博司・兵庫県)

研究報告 藤井真湖
『元朝秘史』におけるイエスイ妃
—グルベルジン・ゴア妃をめぐる
チンギス・カン伝説との関連で—

モンゴル古典文学の精華でモンゴル族最古の英雄叙事詩である『元朝秘史』における、チンギス・カン妃の一人イエスイ妃の叙述に隠された反チンギス志向を、チンギスが娶った西夏の王妃グルベルジン妃の伝説と比較検討することによって指摘する。両者は、夫を殺された後にチンギスの妻になる点で共通し、ほぼ二重写しになっているという。発表者は秘史と民間や年代記にあらわれるグルベルジン妃伝説(11話)のテキストを比較分析した結果、イエスイ妃がグルベルジン妃伝説の語り手、さらには作者である可能性に言及し、秘史におけるチンギス逝去の唐突な叙述について、非明示的には反チンギス志向を担保するためだったのでないかとする。

この発表に対し、書物といくつかの伝説だけで語り手論を展開するのは、伝承を考えていく上では限界があり、それは外国を対象にした伝承研究への不信でもあるという意見が出された。方法論の問題、対象となる外国の当該地域に暗い聴衆に対する発表の仕方は吟味されなければならないだろう。私も外国の伝承研究に携わる身として、その方法と意義、それを伝える方法を考え続けていかなければと思う。

(間宮史子・神奈川県)

第34回大会 シンポジウム
うた・語りにおける人称
—だれが語り歌うのか—

「アイヌの物語文学から」

中川 裕

「日本文学の文体からみる人称」

古橋信幸

「琉球の神歌の「人称」

島村幸一

司会 三浦佑之

前年度第33回大会シンポジウムのテーマは「ウタとカタリ」であった。それを直接承けているわけではないが、今年度は、口承表現としてのウタ・カタリにおける「人称」に焦点を絞り、その表現を考えることにした。音声によって発せられる表現においては、「だれ」が歌い、語るのかということが、意識しようがしまいが、形成される表現に大きく関与するのではないかと考えてのことである。

書かれた表現の場合、音声表現がもっている一回性や臨場感といったものを捨象してしまうために、自覚化された語り手や歌い手が表現を統御しているとしても、だれが語り歌うかという点では、かなりあいまいで自在なところがあるように見える。ところが口承文芸では、生身の発話者が表現されることばに寄り添って存在することもあって、発せられることばを語り、歌うのはだれなのかという問題をおのずと意識せざるをえないのだと思う。

たとえば叙事詩のなかで「われ」と発せられたとする。その「われ」が、今まさに音声を発している生身の語り手（歌い手）その人でないとするれば、語り歌う「われ」とはだれか。あるいは、なぜ一人称である「われ」と発する必要があるのか、と。いや、その前に「われ」を一人称と決めていいのかという点が問題になるはずだ。最近の、アイヌの口承文芸では、一人称という呼称そのものが検証されなしている。では、古代ヤマトや奄美・沖縄における歌や語りでは、一人称という説明は可能なのか。

死者が歌い、神が語る表現世界のなかで、死者であり神であるということほどどのように保証されるのか。なぜ人びとは、死者や神の声を聞くことができるのか。口承文芸を成り立たせる根幹に人称を据え、その本質に迫ってみたいというのが、今回のシンポジウムの意図であった。

アイヌ語の人称をひとくくりに「一人称」と規定することをうたがう中川裕氏は、アイヌ語の人称の概略を整理しながら、「うた」や「となえごと」で用いられ

る「ク」が叙述者＝語り手という関係をもつものに対して、物語では「ア」という人称が用いられるが、その「ア」は「聞き手に対して、その話の主体となっている人物が、語り手自身とはイコールではないということを示す形式」だというふうに説明する。どちらも一人称とされる「ア」と「ク」だが、基本的な位相が違っているのである。

古代・中世の日本文学を対象として人称について論じた古橋信幸氏は、語り手が物語のなかに入り込むことで成り立つ、聞き手をも巻き込んでしまう文体について論じた。たとえば、かな物語において主語が省かれ場面が自在に転換するようにみえる文章が成り立つのは、それが場の表現であり、語り物文芸などにおける語り手の位置といったものを抱え込んでいるからではないかと言う。文章史・文芸史的な視点に立ち、音声的な表現と書かれた表現とのあいだを行き来しながらの考察であった。

「おもしろさうし」を中心とした琉球文学を専門とする島村幸一氏は、宮古島狩俣に伝えられる「神歌」における「わんな」（我は）という表現を取りあげながら、この語が「神の名乗り」としての一人称であり、「ばん」のような通常の宮古方言とは異なる特殊な表現であることを明らかにしていった。また「おもしろさうし」においても、「あが」と「わが」という一人称は区別されて用例の交叉はなく、「あが」や「あん」などア系統の一人称は特殊な表現と認められるのではないかと述べ、今後の展開が期待できることを示唆した。

フロアからは、人称だけにこだわることへの疑問も出されたが、場の問題を含めて口承文芸において人称を考えることの必要性、可能性を指摘する発言が多く出された。パネリストを引き受けていただいた三氏と会場にお越しいただいた方々に感謝する。

(三浦佑之・東京都)

「伝え」では、フィールドからの雑感・小報告や、研究会活動の総括、博物館における企画展示活動、大学や研究会における講演会・シンポジウム、ご著書・報告書の刊行など、会員の活動情報を広く募集いたします。

いま向き合っているフィールドや事例を相互に発信しあい、より豊かな学問空間を作っていききたいと思います。

お気軽に「伝え」編集委員、もしくは学会事務局までご連絡ください。

「伝え」編集委員 飯倉義之

ekura1127sakura@yahoo.co.jp

事務局便り

○寄贈書籍

琵琶盲僧・永田法順を記録する会編『日向の琵琶盲僧 永田法順』第二刷 2006年3月／日本民俗学会『日本民俗学』258～260 2009年5月・8月・11月／新潟県立博物館『研究紀要』第10号 2009年10月／神奈川大学日本常民文化研究所編『民具マンスリー』第42巻8号～第12号 2009年11月～2010年3月／国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告』第153集 2009年12月・第155集～第159集 2010年3月／『国立歴史民俗博物館資料目録[9]見世物関係資料コレクション目録』2010年1月／日本民話の会『聴く語る創る』18号 2010年1月／日本民話の会『日本民話の会通信』No.207～209 2010年1月・3月・6月／『神奈川大学日本常民文化研究所論集 歴史と民俗』26 平凡社 2010年2月／青森県『青森県史叢書 西浜と外ヶ浜の民俗』2010年3月／畠山篤著『万葉の紫の発想—恋衣の系譜』アーツアンドクラフツ 2010年3月／国際日本文化研究センター『日本研究』第41集 2010年3月／福岡市『新修福岡市史 特別編 福の民 暮らしのなかに技がある』2010年3月／国文学研究資料館『第33回国際日本文学研究集会会議録 語られる人称・なぞらえる視点』2010年3月／小松和彦編『妖怪文化叢書 妖怪文化の伝統と創造—絵巻・草子からマンガ・ラノベまで』せりか書房 2010年9月

○機関紙データベース化についてのお願い

学会では機関紙のバックナンバーをデータベース化して会員及び一般に公開して利用の便宜をはかりたいと考えております。データベース化は順次古い号から進めて参りますが、現会員で機関紙に執筆された方でデータベース化にどうしても不同意な方は、お申し出いただきたく存じます。通信等での個別の許諾はとりませんので、事務局宛にご連絡をお願いいたします。

なお、お亡くなりになった会員の方々には著作権継承者宛、個別に許諾の連絡を取ります。

* 今後、機関誌34号以降の執筆者については、データベース化に同意して執筆されたものとして許諾はとりません。

2010年10月1日

○日本口承文芸学会事務局

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學文学部 花部英雄研究室

TEL:03-5466-0224 (直通) / FAX:03-5466-0368 (日本文学資料室)

E-MAIL: koshobungei@mail.goo.ne.jp

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なされる場合は、事務局に連絡をいただくか、学会HP (<http://ko-sho.org/>) から用紙をとりこんでダウンロードしてお申し込みください。

入会金 1000円、年会費 4000円です。

郵便振替口座 00180-4-44864をご利用下さい。